

令和4年度事業報告書

特定非営利活動法人 アニマルクラブ石巻

事業の成果

令和4年7月に、石巻市内のペット可災害復興住宅に住んでいたおじいさんが救急車で搬送され、1カ月近く経ってから、おじいさんの部屋から猫の鳴き声が聞こえたそうです。隣の住人が玄関のドアの脇にあるお勝手の小窓から、中の様子をうかがうと…猫が一瞬横切って、びっくり仰天。「まさか、置いたままだったなんて…」と、慌てて管理事務所に電話しました。部屋を開けると、鼻を突く悪臭…窓も閉めきりで、熱中症も危ないところでした。「この1カ月間、何を食べていたんだろう？」と見回すと、食い破られて空になったドライフードの袋が一つと、幾らか残っているのがもう一袋。買い置きがあって命拾いしましたが、なかったら、転がっていたのは糞ではなくて、餓死した猫の死骸だったかもしれません。お隣さんいわく「誰かが訪ねて来たようだよ、猫を連れて行ったんだねなんて噂を聞き流してしまっていた…」。

救出された猫は7歳と5歳のメスでしたが、避妊手術を受けていませんでした。どちらも人懐っこかったので、ワクチンや手術を済ませてから、里親を探しました。確認すると、公共住宅に入居の時にチェックされるのは、種類と頭数だけ。これでは、閉ざされた室内で、多頭飼育崩壊が起きても不思議ではありません。単身者も多い公営住宅です。行政は、ペットの情報の提出と互助会に入ることを入居の条件として、居住者は自治会を組織して各部屋の名簿を作り、「誰かに何かあった時には助け合う」関係を作らなければならないと思いました。

寒くなる季節には、こんなこともありました。

「自分が入院したら猫の面倒を見る人がいなくなるから」と、かなり無理をしていたおばあさんは、病院に運ばれた時は、もう帰って来ることは無理な状態だったそうです。ひとりぼっちになってしまった猫の『たま』を見かねて、おばあさんの介助ヘルパーさん達が交代で毎日通って、ごはんとトイレ掃除を続けてくれました。アニマルクラブにも相談をよこし、里親探し会場にも連れて来ました。去勢手術やワクチンも受け、血液検査も問題なかったけれど、5歳は過ぎている『たま』には、なかなか申し込みは来ません。私は、別な猫に希望を出していたご夫婦に、『たま』の話をしてみました。良い返事をもらい、たまは、《第二のニャン生》をスタートすることができました。

孤独な老人が増え、残されるペットの行き場がない現実があちこちで起きています。そうなる前に、『やがて餓えなくなる』『せめて今、避妊・去勢手術だけは受けておかないと…』と気づいて、アドバイスできる人が動くかどうかで、そこに在る命の行方が変わります。

《お先真っ暗》を《先見の明》で照らすために、行政は、お年寄りの状況を知る人からの情報で、飼い主が健在な間に、やがて残される命の危機を未然に救うシステムを稼働するべきです。転ばぬ先の対策を～命をつなぐネットワークが必要だと痛感しています。